結婚学の研究 I

——期待される母親像について——

古澤　暁

はじめに

学校教育の現場でみられる不幸な子ども，問題行動をおこす子どもを理解し，指導するとき，子どもだけを取り上げて考えるだけでは問題は解決できない。その子どもの生活している家庭の中までもはいり込んでいかなければならないし，ときには，その家庭の創設までさかのぼって考えてみることも必要になってくる。

「男と女の結びつき → 子どもの誕生 → 子どもの養育 → 子どもの独立 → 老いていく」このような生活周期から考えてみるならば，核家族の出発は男と女の出合い，つまり夫と妻の関係から始まり，その生活は夫婦本位の生活の仕方である。それが子どもの誕生によって，親と子，つまり母と子の関係ができることになる。それは子ども本位の生活の仕方である。家庭の中に夫婦本位の生活の仕方と，子ども本位の生活の仕方との原理的に矛盾する二つの関係ができることになる。この結合点にあって二つの関係を調整していくのが，妻であり，母であるところの女性である。家庭の中における女性の役割は非常に重要な位地を占めているということができる。そこに女子教育の必要性，重要性が考えられる。

その女子教育は何か特別な教育がなされなければならないのかというと，そうではない。教育一般にいわれている人間教育である。それは個人と社会の幸福のために個人の円満な人格の成長発達を助けるいとなみである。

すなわち，健全な人格をそなえた人間に育てる教育である。また，「健全な人格育成は健全な家庭経営から生まれる」といわれているように，一面，女子教育は家庭経営の能力をもった人間を育成する教育でもあると考える。

人間的条件を確保するための家庭とは，どのようにすればよいのだろうか。

結婚によって家庭が形成される。このときに健全な家庭経営について，結婚する二人の間で，理解し合い，不幸な子どもをつくらないためにも子どもの養育についても理解し合っておくことである。さらに，性についても理解を深めておくことである。性のために家庭不和，家庭崩壊がおこるからである。

いままで，わが国では性をいやしいものとして否定する思想があったと思うのである。私は性を全人格的な問題としてとらえ，性というものを子どもにきちんと教え，人間生活の中に正しく位置づけ，人間的に性を正しく認識する教育がなされるべきだと考える。そして，基本的人権において，男女の性による差別はなく，全く平等であるし，子どもをみごもった女性は，すべて母親として平等にあつかわれるべきだと思う。

このことは，いのちを大事にすることであり，人間を大事にすることなのである。このような思想は家庭生活の中で形成されていくものであり，性の教育は生まれたときから始められる。それは特別に教育するものではない。家庭生活を通じての教育なのである。性教育は教育活動の総和である。すなわち，人間教育そのものである。

私は人間教育で性の教育までも完成されるならば教育は一応完了したということができると考えている。性の問題は重要な教育の柱の一つなのである。

この研究は結婚前の青年に対する結婚，家庭設計についての教育，つまり結婚学を考えるための一つの資料を得るためのものである。

目　　的

女子学生の実態を把握し，その教育を考えることを目的としている。ここでは女子学生が考えている理想の母親像を求めてみる。

方　　法

1. 調査方法　理想の母親像（どんな母親になりたいか）について，記名させて，自由記述させたものを項目をたてて分析する。
2. 調査期日　昭和45年２月
3. 調査対象　短大１年生（国文学科）167名

結　　果

古澤の調査

項　　目	頻数
1. 自分の母のような人	22
2. 理解ある母	77
○ よき理解者	45
○ 信頼される母	17
○ 尊敬される母	10
○ 子どもの意志を尊重する母	5
3. 教養のある母	74
○ 人間らしく生きる母	23
○ 教養ある母	13
○ 子どもと共に発展する母	13
○ 自分の仕事をもつ母	10

（牛島義友，昭和30年，家族関係の心理，金子書房，116頁より，女子大学生，第13学年相当，97名の調査）

項　　目	頻数
1. 自分の母のような人	14
2. 理解ある母	52
○ よき理解者	28
○ 信頼され尊敬される母	13
○ 子どもの意志を尊重する母	8
○ 宗教心を干渉せぬ母	3
3. 愛情ある母	25
○ 深い愛情	20
○ 犠牲的精神	5
4. 教養ある母	25
○ 高い教養	12

○ 社会の動きについていく母	7
○ 趣味をもつ母	6
○ 子どもの勉強を指導できる母	2
4. 良妻賢母	60
○ 賢　母	16
○ 良妻賢母	16
○ 家庭にいる母	14
○ 家庭を円満にする母	14
5. 話し合える母	44
6. 愛情のある母	32
7. 友人のような母	24
8. 姉妹のような母	2
9. 明　朗	6
10. 健　康	6
11. 子どもの見本になる母	5
12. 美しい母	2
○ 内に優しさと深みをもった女らしい人	2
○ 子どもと共に発展する	7
○ 自分の仕事をもつ	4
5. 健　康	13
6. 子どもの勉強を指導できる母	3
7. 公　平	4
8. きびしさ	3
9. 明　朗	2
10. 誠　意	2
11. 女子に劣等感をもたせぬ	2

養育態度

項目	頻数
1. 教育ママにはなりたくない	34
2. きびしさ	23
3. 自由にさせる	15
4. のびのびと育てる	10
5. やさしさ	9
6. 自律性	7
7. しつけのできる母	7
8. 社会的責任感	4
9. ひろい心の持主	3
10. つきはなす	1
11. 甘やかす	1
12. 素直な子	1
13. 実行力のある子	1

この調査から考えられる理想の母親像は，理解のある母，人間らしく生きる母，教養のある母，家を守る良妻賢母，愛情のある母，友人のように気楽に話し合える母，あかるい健康な母，子どもの手本になるような母などである。

養育態度としては，教育ママには絶対になりたくない，きびしさ，やさしさ，のびのびと子どもの自由を束縛しないで，ある程度自由放任主義で育てる。自律性や責任感のある子どもに育てるということである。

人間的には欠点があるけれども，自分の母のようになりたいといっているものが22名いる。そして，絶対すばらしい母であるともいっていることである。

反面，下記の例文にみられるように，現代社会における母親の生き方については世代のちがいが感じられる。母の姿をみて，それを批判して，そこから理想の母親像を描きだしている。

例1.　理想は良妻賢母の母親である，自分は昔の女性の様な三従の徳は美徳のようではあるが，現在では年とって子どもに面倒を見てもらおうと考えるのは甘い考えだと思い，老後の生活設計までしている母親がいいと思う。子どもからこんなこともわからないのといわれることがないように常識と教養を身につけ，いつでも子どもから慕われる優しい母親になりたい。そして親と子の間にあるのは断絶だけだといわれないように努力したい。自分の子から「私のお母さんは理想的だ」といわれるようになりたい。

例2.　子どもを育てる時は絶対大家族の中では育てたくない。子どもには自分の選んだ道を歩かせ，私はそれを遠くから見守ってやれるようなやさしさ，あたたかさをもったきびしい母親になりたい。子どもは絶対カギっ子にはさせない。

例3.　自分を犠牲にして夫と子どもを愛するだけで一日を終り疲れ果て，又朝を迎える生活なんてがまんできない。決して夫や子どものために生きるのではなくて自分のために生きたいと思う。自分を忘れた所に妻や母と

なる資格があるだろうか。

例4.　理想的な母親とは，よく言われている教育ママではない。自由奔放な生活をさせ，無理な礼儀作法をおしつけないこと，子どもは親の生活をまねるものであるから母親がしっかりしておれば，子どもも自然とよくなるであろう。

例5.　現在，日本中の母親は子どもに大きな夢を持ちすぎているのではなかろうか。戦時中の頃はなんだかんだと言って自分のもっていたころの夢を子どもにおしつけている。実際に私もその夢をおしつけられた中の1人である。私の考は，子どもに思うような暮しをさせ，親の夢を子どもにたくするよりは子どもが将来何になるかという夢を親もいっしょになってのばさせてやる。そのようになりたい。

例6.　母親が子どものために犠牲になってもよいのだろうか。人間としてもっともっと大切なことがあるのではないかと私は思う。理想の母親とは子どもを育てることばかりでなく，女性または人間として自分を生かす道をみつけた人だと思います。仕事と母親の生活を両立させている人の姿はなんと生き生きしていることだろう。

例7.　一個の人間の人格形成を荷う母親は，その重大性をよく知って，自分自身の人格形成に務め単に女性として母親としての像を求めるのではなく，社会的存在としての学習と努力を惜しみたくないと思う。

例8.　仕事を持った母でありたい。自分の存在をみとめた，自分の生涯に自信をもった親でありたい。そうであれば子どもに対しても良い事だと思う。

例9.　子どもに対して理解のある親であること，子どものために自分をぎせいにするのではなく自分は自分として独立した生活をもち自分の意志をもつ。

例10.　もう一つ子どもから見て，好い奥さん（父親の）だなと思われるようでなくてはいけないと思います。母親としては完全であっても奥さん

としては失格であり，いつも御主人が不平をいっているようでは良い母親のしかくはないのではないかと思います。母親は太陽のようでなくてはいけないと思います。

例11．まず第1に夫に従ってゆきたい。子どもは自由にありのまま育てるのが一番だし，それでなくてはいけないと思う。今，現在私の家で暮している，そんな風な家庭を作りたいと思う。

例12．子どもはなるべく放任して，伸び伸びと自己表現できる子ども，たくましく一人で歩いてゆける子どもに育てることが望ましいと思う。

例13．理想としては放任主義です。自分の行動には責任を持てということです。

家庭的背景

母親の学歴	
高等小学校卒	25
高等女学校卒	116
専門学校卒	8
大学卒	1
無記入	17
計	167

学生の略歴

昭和25～26年に生まれ
昭和32年小学校入学
昭和38年中学校入学
昭和41年高等学校入学
昭和44年短期大学入学
昭和46年同学卒業予定

母親の年令			
36才	1名	47才	10名
37	3	48	9
38	4	49	3
39	9	50	10
40	16	51	1
41	19	52	3
42	20	53	4
43	13	54	1
44	16	55	1
45	12	56	2
46	7	不明	3

母親の学歴は中等教育以上の学校教育を受けたものが75%を占めていることである。 母親の年令からは昭和20年までに義務教育を終えていたこと，戦後の歴史的混乱の時期に青春時代を過していることが特徴的なことである。 母親が働いているもの35名である。	

考　　察

牛島氏の研究と比べてみるとき，調査対象は女子大生，第13学年相当ということでは，同一条件である。しかし，調査時期が20年余の年教の開きがある。この間の社会状況の移り変りは非常に大きい。これが両者の結果の違いとなっている。

いつの時代にも，自分の母のような人になりたいと考えているものがいるのは自然なことであろう。

また，自分の母親はすばらしい，生活の目標として努力したいと書いているものがいることは，家庭教育のたまものであると思う。

母親のもつ性質としては，理解ある母，愛情ある母，教養ある母等は，一般的なものであろう。牛島氏の研究とも変りはない。

例文（3，6）にみられるが，母親が子どもの犠牲になる必要はないという考え方は，自分自身をいかそうとする生き方であろう。これは戦後の教育がもたらしたものであろう。牛島氏の研究には，犠牲的精神の愛情ということがでているのに比べると変っていることである。

仕事を持つ母ということが多くみられるのは，女性が職業に就くことが社会的に一般化してきたことによるものであり，ウーマン・パワーとしての社会進出を物語るものであると考える。

しかし，一方では，外に働きにでるのを嫌って，家庭にいる母，家事だけに専念する母として内にこもる母を期待している。このことは良妻賢母

になりたいと考えるものが，約1/3ちかくいることにつながっている。牛島氏の研究では良妻賢母に反感さえ感じられたというのに比べると変っている点である。この違いは女子学生が生活している家庭，地域の環境の違い，および，時代の相違によるものと考えられる。

本研究の対象になった女子学生は下関市，北九州市を中心とした地域から進学してくるものが大半である。その地域性とも考えられる。また，母親の学歴は旧制高等女学校を卒業したものが最も多く，高等小学校，専門学校，大学等の卒業は少ない。母親の年令からは，昭和20年までに義務教育を終えている。そして，旧制度の学校教育を受けた人達である。このことからくる家庭の影響であろうか。

本研究の対象の女子学生は，戦後のベビーブームの終り，戦後の経済，社会が安定し，成長，発展していく時代に生まれ育ってきたのである。しかし，一方では，勤評問題，学力テスト問題，受験戦争，非行化，教育不信，教育ママ，教育の現代化，多様化，等その教育制度が一つの転換期に，激動期に学校教育を受けてきた。さらに，社会問題として，嫁姑の問題，老人問題，女性上位，蒸発ママ，カギ子，捨子等のさわがれる中に育ってきているのである。

新しい女性像としてのウーマン・リブの姿はみることができなかった。ウーマン・リブ女性解放について，まだ表現できるまでになっていなかったと考えられる。また，日本経済の高度成長と好景気が続くなかで，マイホーム主義，それに，母性を核として，つくられた日本の家庭文化が妻・女・母としての三位一体の幸福を実現させ，女の幸福を妻と母この生活に充実感をもたせようとすることが，新しい女性像をつくりだせないでいるのではないだろうか。

これらの理想の母親像は男性が求めている女性像によっても影響されるものであろう。理想の母親像は，男女の意識の相互作用によってつくりだされるものと考えられる。

む　す　び

女子学生が考えている理想の母親像は理解，教養，良妻賢母，話し相手愛情などの性質であり，そして，自分の意見を持ち，社会人としての自覚をもって，人間らしく，人生を生きる女性である。

男子学生が考えている理想の母親像，家庭像について調査・研究することによって，女子学生がいだいている母親像とちがった期待される母親像が描けるだろうと考えている。

この研究に動的社会環境からの影響についての分析も必要だと考えている。

参　考　文　献

中島義友　家族関係の心理　金子書房　昭和44年16版